

2011

カタリバが、子どもたちと過ごした10年間



震災の
強さへの
悲しみは



10

THE 10 YEAR
HISTORY OF
CO-LABSCHOOL
@TOHOKU

2020

KATARIBA

Shape the Future



地震があったのは小学2年生。
母も弟も妹も、家と一緒に流された

あの日は、突然の大きな揺れに、
教室の机の下に隠れました。
隠れながら直感的に
「次は津波が来る。逃げないと」
と覚っていました。

2日前にも大きな地震がありましたが、
それよりももっと大きな揺れでした。
先生の誘導でまず高台に逃げましたが、
そこも危ないだろうとなりました。
中学生や地域の人と一緒に
「もっと上へ、もっと上へ」
と山を登って逃げました。

津波が町を飲み込んでいく様子を、
山の上で、木々の隙間から見ました。

その後、避難所で待っていると、
父が迎えに来てくれました。

ただ、家にいた母と6歳の弟、3歳の妹は
家と一緒に流されてしまいました。

助かるのを、**奇跡**にしたいくない

さらにもっと多くの人を救うには

実は、震災当時に通っていた小学校は

「鶴住居小学校」でした。

人的被害が少なかったと美談化されていますが、亡くなった人がいないわけではありません。

もっと多くの人の命が助かるには、

ひとりひとりが自分の判断で

安全な場所を見つけて

逃げる力を持つことが大事だと思います。

そこで、どうやって逃げるかを

考える力が身につく

「物語をつくる、防災教育」を、

地域の小学生向けに

マイプロジェクト※として実施してみました。

※地域や身の回りの課題を見つけ、解決に向けて実行することを通して学ぶ実践型探究学習

自分の力を高めて、**地域に還元**していきたい

こうした取り組みを続けてこられたのは、

身近に支えてくれる大人が

たくさんいたからだと思います。

通っていた大槌高校では、

私が高校2年の時から、

カタリバの人たちが学校の日常や

放課後に関わるようになりました。

自分でも気づかなかった視点やアイデアの

アドバイスをたくさんいただき、

防災の取り組みをより良いものに

することができました。

これからは大学に進学して、

様々なことを学びたいです。

「防災」については

ずっと持ち続けていくテーマなので、

何ができるかは考え続けたいと思います。

まずは自分の力を高めて、

ゆくゆくは地域に何か還元していきたいです。

「防災教育」はそれなりの

手ごたえはあったのですが、

対象となる世代が限られます。

さらにもっと多くの人の命を救うには、

どうすればよいだろうと考えて、

災害時に避難行動をうながす

「防災無線」の改善に取り組むことにしました。

無線でただ「逃げてください」と

呼びかけるだけではなく

「東日本大震災よりも大きな津波が

押し寄せる可能性があります」と

具体化することで、より意識を

持つてもらおうというアイデアです。

町の人たちにも意見を聞いて回り、

役場の人たちも導入について

検討してくれています。



古川真愛（ふるかわ・まなと）

釜石市出身。大槌高校3年生。

大槌高校でマイプロジェクトに出会い、「想像力」をキーワードにした防災活動に取り組んできた。

父の影響で小2から10年間野球を続ける。

大学受験を乗り越え、春から東京で学ぶ。

震災当時は小4。

その後の記憶はあいまいで

今も全町避難が続く、双葉町で生まれ育ちました。地震があったのは、教室で帰りの会をしていたとき。その後からしばらくの間の記憶はあいまいで、ところどころしか覚えていません。

最初の1、2日くらいは小学校の体育館に避難して、川内村で母と祖母と合流しました。

両親は教師で、母が勤務していた小学校は津波も来ていました。なので再会できたのは、友だちより少し遅かったかな。

バスに乗って埼玉のスーパーアリーナに集団避難し、廊下に段ボールを敷いて2週間ほど過ごしました。

その後、祖父母のいる地域の小学校に転入し、

中学の入学と同時に、いわき市に引っ越しました。

中学は生徒数が多いマンモス校で、幼馴染もおらず、

人間関係などが大変なこともありました。

カタリバの「双葉みらいラボ」は 学校の中の私の避難場所

高校は、途切れていた故郷との繋がりを探すような形で、前年開校したばかりのふたば未来学園高校に行きました。

カタリバのコラボ・スクール「双葉みらいラボ」がふたば未来学園で始まったのは、高1の秋でした。毎日のように、放課後にみらいラボに通っていました。

私の場合は、勉強する場というよりは、そこでスタッフといろんな話をする時間が貴重でした。最初は好きな本や漫画の話をしていましたが、

そのうち、震災のときのことや転校先の小学校でいじめられていたことなども話しましたね。

震災後の転校でいじめにあったあたりから、クラスで友だちを作るといことは、しなくなりました。

だから高校でもクラスに友だちはいませんでしたが、部活では親友と呼べる人ができました。

高校では演劇部に入り、脚本を書いていました。震災体験など、自分たちの経験したことをもとに

芝居をつくり、部員同士の内面的な

ぶつかりあいも起きました。

演劇を作り上げる中で、激しく部員と衝突したりして、ストレスで胃潰瘍になったこともありです。

部員と取っ組み合いのけんかになってしまったとき、

みらいラボのスタッフのなべさんが間に入って話を聞いてくれました。

当時は負の感情をコントロールする術がなかったんですね。

どんな自分をさらけ出しても、頭から叱りつけることなく、受け止めてくれたのがラボでした。

日常のちやもや、将来のこと、生き方などを話すことで

自分の感情を言葉にできて

頭の中が整理されていく。

みらいラボは私にとって学校の中の避難場所みたいなところでした。

社会人経験を積んで力をつけて、 いつか福島に戻って還元したい

父がよく手料理をふるまってくれるのですが、そんな父に憧れて中学生のころからよく料理をしています。演劇部の部員にもオムライスを作って「おいしい」と喜んでもらって。だから漠然と「カフェのオーナーって、いいかも」と思っていました。

そうしたら高校が、地域との交流カフェを校舎につくると聞きつけました。オープンには私の卒業後でしたが、オープンの準備は手伝いました。高校のカフェは、訪れた地域住民との交流を通して地域の課題に向き合い、解決に向けて共に知恵を絞る場というねらいがありました。

震災から10年経っても原発の問題は解決されていませんし、双葉郡の人口は減っています。だからこそ、人と人が自分の想いを自由に発言して、お互いに分かりあえるような居場所が必要だと思います。

今は大学で経済学や経営学を学んでいます。

「卒業後も福島とのつながりを継続していきたい」と考えて、ふたば未来の先生と一般社団法人「結び葉」をつくり、双葉郡の特産品を東京で販売するサポートもしています。東京に住んでいます。双葉町が今どんな状況で、これからどうなっていくのか、常に情報は集めています。

卒業後については、まだ具体的なプランはありません。でも、社会人経験を積んで力をつけて、いつか福島に戻って、地域や高校、お世話になった人たちに還元したいと思っています。

石井美有(いしいみゆ)

福島県双葉郡双葉町出身。

震災で家は避難区域となり、中学生からいわき市で暮らす。高校は隣町・広野町に新設された「ふたば未来学園高校」に進学し、校舎内にあるコラボ・スクール「双葉みらいラボ」に放課後通い詰める。演劇部にも所属し、作品づくりに力を入れる。

2019年から立教大学で経済学を学ぶ。2021年双葉町成人式の代表を務める。

家は流され、狭い仮設住宅で、 お刺身のように寝た

震災があったのは、小学校の卒業式の前日でした。
友だちの家において、高台に避難しました。

みんな転びながら必死で逃げて、
上の方まで火が回ってきて：
なんとか体育館に避難できました。

海の近くにあった自宅は流出しましたが、
幸いなことに家族は全員無事でした。
家族は下に妹と弟がいて、祖父母も入れて7人。
仮設住宅は本当に狭くて、
お刺身のように寝ていました。

コラボ・スクールは「行ってみたら」と
親に言われました。
同じ部活の友だちもいるし、
じゃあ自分も行き始めました。
吹奏楽部の部長をしていて、
吹奏楽が大好きだったので、
放課後も友達と会えるな、と
軽い気持ちでしたね。

コラボ・スクールでの出会いから、 東京への進学を考えるように

あるときコラボ・スクールのボランティアで、
カナダの大学に通っているというお姉さんが来たんです。
その方は高校を中退し、自分でお金を貯めて留学していました。

小さい町の中ではそんな人に会ったことがなかったので、
「そんな生き方があるんだ！」と、驚きましたね。
部活の悩みも聞いてもらったりして、本当に懂れました。
私も留学したり、海外の人と交流したりしてみたいな…って思いました。
でも、夢ができてすぐに行動したわけでもありません。
「高校を卒業したら、岩手県内の大学に進学かな」
そんな風に漠然と思っていたんです。

ある日、カタリバのスタッフに「進路どうするの？」と聞かれ、
「たぶん、県内の大学」と答えたら、「安易だなあ」と言われたんです。
その言葉が心にひっかかりました。
確かに、よく調べもせずには自分は安易だと感じたんです。

それで日本中の大学を調べて、自分のやってみたいことを考えたら、
「国際観光」を学べる東京の大学を見つけたんです。
大学で働きながら学費を支給してもらえ、奨学金もあって、
父の収入に頼りきりの我が家でも、ここならと思いました。



高木桜子（たかきさくらこ）

岩手県大槌町出身。

5人きょうだいの長女。吹奏楽が大好きで、10年近く続けている。放課後にコラボ・スクール大槌臨学舎に通い、そこで英語を学んだことで、留学したいという夢を持つようになる。東洋大学の奨学金制度を利用して国際観光学部に進学し、昼間は大学職員として働きながら夜間の授業を受けて、東京で4年間学ぶ。2021年春に大学を卒業し、4月からカタリバ職員として大槌で活動予定。



働きながら大学で学び、 留学したいという夢を叶える

大学生活は本当に楽しかったです。

アメリカ、中国、インド、イギリス、フィンランド…

世界中から学生が集まってきていて、

友だちがたくさんできました。

その友だちを大槌に招いたこともあります。

もっと英語を学ぼうと、半年間イギリスに留学もしました。

釜石で開かれたラグビーW杯では、

英語での道案内や、郷土料理を紹介するボランティアもして、

海外の方たちに感謝されるという経験もできました。

「こんな風に世界とつながれるんだよ」と

地元の後輩たちにも知ってほしかったので、

コラボ・スクール大槌臨学舎でインターンもしました。

自分が応援してもらったから、 今度は私が大槌の子どもたちを応援する番

震災から10年が経ち、大槌も復興が進んできたなと感じます。

友達も町で就職したり起業したり、新しい町をつくりはじめています。

私もみんなに負けていません。

それに大槌の未来は決して楽観視できません。

今の人口減少のスピードでいくと、大槌高校はなくなってしまいます。

東京や海外で生活して、大槌の良さも課題も見えるようになりました。

町の人たちや子どもたちが地域のことに関心を持って、

もっと大槌を誇りに思えるような、きっかけづくりをしたい。

だからカタリバの大槌拠点で4月から働くことにしました。

私はコラボ・スクールで将来の選択肢を広げてもらったし、

自分の夢を応援してもらえたから。

私もそんな風に、後輩たちが頑張っていることを応援したい。

いずれは学んだことを活かして観光業の仕事もしてみたいけれど、

今はまず、自分が育った大槌の力になりたいです。

東日本大震災の被害状況とカタリバの活動

カタリバ代表・今村久美が被災地に入ったのは2011年4月17日。伝手をたどってあちこちを車で回り、最後にたどり着いた宮城県女川町で、最初のコラボ・スクールをつくることになりました。また、その動きを見た人から、「町のリーダーが流されている最も大変なエリアだ」と岩手県大槌町を紹介され、2校目は大槌でつくることが決定。3校目は、ようやく高校が再開されるようになった福島県双葉郡で開校しました。



女川町は宮城県内で最も死者行方不明者数の割合が高かった町。建物被害率も9割弱と大きな被害を受けた。主産業の漁業、水産加工業は大打撃を受けた。避難所は津波を逃れたわずかな高台に設置され、人はそこに詰めかけた。2011年11月9日に避難所は閉鎖し、仮設住宅での生活に切り替わった。

震度	6弱	
津波被害	最大津波高 浸水区域	18.5m 329ha (2011年8月)
人的被害	死者・行方不明者数 ※死亡認定者数含む 震災関連死者数 合計	827人 22人 849人
建物被害	全壊(流出含む) 大規模半壊 半壊 一部損壊 合計	2,924棟 (66.3%) 149棟 (3.3%) 200棟 (4.6%) 661棟 (15.0%) 3,934棟 (89.2%)
避難状況	避難所数 避難者数	最大25か所 5,720人 (2011年3月13日)

災害直後の子どもたちの様子

町の小中学校は高台にあり、津波はぎりぎり届かず、学校にいた子どもたちは助かった。2011年4月、学校が再開するも、多くの子どもたちは避難所から学校へ通い、避難所へ帰っていくという生活をしてきた。避難所も限られた広さしかなく、テントでの生活を余儀なくされていた家庭もあった。こうした中、路上で勉強する子どもなども見られた。

カタリバが始めた支援

2011年7月4日、被災地の放課後学校コラボ・スクール「女川向学館」を開校する。場所は、津波の被害は免れたものの、避難所となっていた女川第一小学校校舎の1階部分を町から借りた。当初は、町の小学1年生から中学3年生までを対象に、教科の学習支援を行う。



大槌町は岩手県内で最も死者行方不明者数の割合が高かった町。建物被害率も7割弱と大きな被害を受けた。町庁舎にいた町長をはじめ、多くの職員も行方不明となり、行政機能は麻痺。その後の火災によりさらに被害は広がり、数日の間、町は外部から孤立した状態になった。

震度	6弱	
津波被害	最大津波高 浸水区域	22.2m (吉里吉里港東側) 375ha (2011年8月)
人的被害	死者・行方不明者数 ※死亡認定者数含む 震災関連死者数 合計	1,234人 52人 1,286人
建物被害	全壊(流出含む) 大規模半壊 半壊 一部損壊 合計	3,579棟 (55.8%) 486棟 (7.6%) 102棟 (1.6%) 208棟 (3.2%) 4,375棟 (68.2%)
避難状況	避難所数 避難者数	最大38か所 6,173人 (3月16日)

災害直後の子どもたちの様子

津波に加え、猛火にも襲われた大槌町。高台に逃げた子どもたちは、燃えていく町の様子を高台から眺めていたという。町の小中学校の多くは被災し、子どもたちは被災を免れた高台にある高校や、別の地域の学校の体育館などで授業を受けた。消灯時間が早い避難所や、狭い仮設住宅では、落ち着いて勉強できる環境はなかった。

カタリバが始めた支援

2011年12月13日、コラボ・スクール「大槌臨学舎」を開校する。場所は、町の公民館「上町ふれあいセンター」や寺社「小鎗神社」、「大念寺」、「吉祥寺」を借りた。初年度は高校受験が差し迫った中学3年生を受け入れ、その後、中学1年生から3年生までを対象に、学習支援を行う。



福島第一原子力発電所の事故の影響で、一時は郡内の全町村がまちごと避難。多くの住民は、県内外各地での避難生活を送り、子どもたちは一時就学を中断したり、避難先が変わり頻りに転校したりするなど、生活・学習環境の変化を経験した。

震度	6強	
津波被害	最大津波高 浸水区域	16m 1,700ha (2011年4月)
人的被害	死者・行方不明者数 ※死亡認定者数含む 震災関連死者数 合計	256人 1,504人 1,760人
建物被害	全壊(流出含む) 大規模半壊 半壊 一部損壊 合計	1,817棟 1棟 9,702棟 6,012棟 17,531棟
避難状況	避難所数 避難者数 現在の避難者	双葉郡外へ避難 73,268人 (2011年5月29日) 3457人 (2021年2月5日) ※県内避難者数のみ

災害直後の子どもたちの様子

震災前、双葉郡には17の小中学校、11の中学校、5つの県立高校と1つの特別支援学校があった。2015年4月には広野町に福島県立ふたば未来学園高校、2018年4月には浪江町になみえ創成小学校となみえ創成中学校が開校。2019年4月時点で、葛生村、富岡町、川内村、楡葉町、広野町の小中学校は自町村内で学校が再開している。

カタリバが始めた支援

2017年6月19日、コラボ・スクール「双葉みらいラボ」を開校。場所は、避難指示解除後に新設された「福島県立ふたば未来学園」に隣接するプレハブ校舎。学園の高校生を対象に、放課後の学習支援やマイプロジェクトのほか、未来学園の教育プログラム全体の支援に取り組む。

自分にとって、 どんな場所だった？

「居心地の良い場所であり、
かけがえのない場所」
(24歳会社勤務)

「第三の居場所。
学ぶ場所だけれど、
机に向かうだけの勉強だけでなく
心の成長と安心感を与えてもらえ
る場所」
(23歳アルバイト)

「家の次に
リラックス
できる場所」
(23歳会社勤務)

「面白人間博物館」
(22歳大学生)

「他人との関わり方、
自分と他人との違いを
受け止める場所」
(17歳高校生)

「夢がある場」
(17歳高校生)

「自信を与えて
くれる場所」
(21歳大学生)

「青春！」
(20歳大学生)

通っていた頃の自分に、 いま声をかけるとしたら

「もっとまわりの大人や先生と話し
て！いろいろな想いを持つ大人のも
とで勉強できるのがとてもありがた
い環境だと、当時は全く分かって
いなかったです…」
(17歳大学生)

「社会人になると何かに取り
組む余裕がないので、今の時
間を大切にしてください」
(21歳会社勤務)

「今はスタッフ側になって、
生徒と接してるよ！」
(19歳短大生)

「そのまま自分らしく頑張るね」
(24歳大学院生)

「もっと勉強して、
もう一つ上の高校を目指せ！」
(27歳会社勤務)

「とてもおバカで、いつも泣きながら
コラボで勉強してるよね。その分、
できるようになるよ。コラボに通っ
てたおかげで今、数学が1番できる
教科になっています！」
(17歳高校生)

コラボ・スクール卒業生 275人に聞きました！

コラボ・スクールが
あってよかった
97.1%

コラボ・スクールに通うことで、
魅力的な大人と出会えた
93.5%

コラボ・スクールがあったから、
自分の目標に向かって頑張れた
89.5%

具体的にはどんな点がよかった？

学校と家の往復では自分を変えようとは思
わなかった。いろいろなバックグラウンドを
もつナメの関係の先輩たちに出会えたこ
とで、日常では気づけなかった自分の未来
の可能性を発見することができた。自ら何
かしようと思わなかった自分に、きっかけ
場を提供してくれたこと
(22歳大学生)

友達と、友達みたいにフレンド
リーな先生達と勉強したり遊ん
だり…今でも思い出すとにか
く楽しかったなって思えるから
(19歳会社勤務)

受験の年になる直前に震災が起き、通っていた塾が無くなって
しまい不安だった。勉強を教えて頂ける場所があって良かった
(24歳会社勤務)

高校受験の時にコロナで休校に
なってしまう中、コラボ・スクール
がオンラインで授業してくれた。
不安でいっぱいだったけど最後の
最後までサポートしてくれて嬉し
かった (16歳高校生)

勉強の大切さに気づき、勉強に対する習
慣づくりのきっかけとなりました。また友人
とたくさんの時間を過ごせ、年上の方々と
お話することもでき、大変良い機会を提
供いただき感謝しております。
(24歳大学院生)

何もせずにただ仮設住宅に帰るので
はなく、同級生とのコミュニケーシ
ョンの場所として向学館があったこと
(23歳会社勤務)

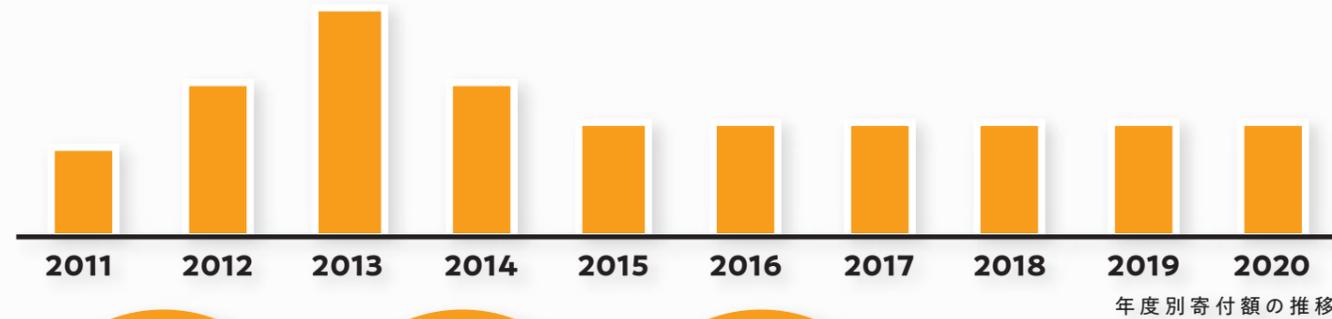
成績が上がったから
(16歳高校生)

放課後に過ごす友達との時間として
の価値は勿論のこと、国内留学や英
会話、講演等のたくさんの刺激のあ
る経験をすることができたこと
(20歳大学生)

今の自分があるのはコラ
ボのお陰だから
(23歳育児&パート)

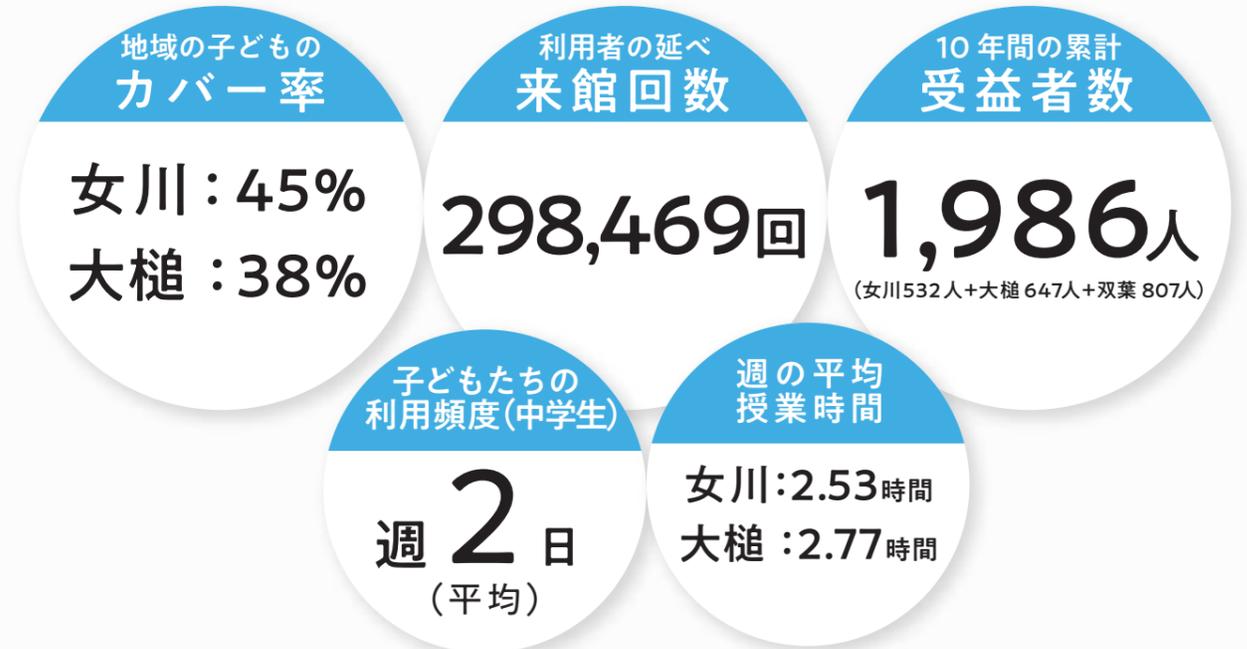
数字で見る10年間の実績

全国から集まるボランティアや企業・団体とコラボレーションしながら、子どもたちの学び舎をつくってきました。たくさんのボランティア、全国からここで働こうと転職してくてくれる仲間は、合わせて518人にもなりました。地域の交流人口の増加にもつながり、毎年開催するお祭りには、過去のボランティアや職員が駆けつけてくれることもあります。



多くの方からのご寄付によって、活動が成り立ってきました。初年度に2億円を超えるご寄付をいただいたことで、2つの拠点の立ち上げをスムーズに進めることができました。また、企業・団体とコラボレーションしたプログラムも多数実施いたしました。

地域の子どものカバー率（地域の子どもの数に対する登録者数）は女川・大槌ともに3分の1を超えており、コラボ・スクールが地域に根付いて活動してきたからこそと考えています。利用頻度は平均週2日ほどでしたが、延べ来館回数は10年で29万回を超えました。



マイプロジェクトへの参加など、教科学習以外にも様々な挑戦機会に向かう背中をおすことで、新しい自分を発見し、自信をもって自分の目標に向かって頑張る機会を届けてきました。コラボ・スクールで学んだことをきっかけに大学進学を決めた子どもたちも。



子どもたちの安心安全な居場所づくりのために、平日は毎日オープン。交通手段がない子どもたちのために通所バスも毎日運行し、子どもたちの日常を10年間支えてきました。

10年前のぼくと、 今のぼく

コラボ・スクールの ボランティアと 生徒と、 振り返る

東日本大震災から10年。コラボ・スクールのボランティアに飛び込んだ若者・きよとは、新たな学びの場を主宰する側に。あのときコラボ・スクールに通っていた中学生・たいきは、新社会人に。2人にとって、10年前のことは、今とどんな風につながっているのでしょうか。カタリバ代表理事・今村久美が聞きました。



きよと：本名、阿曾沼陽登。1989年京都府生まれ。コラボ・スクール女川向学館に2012年夏からボランティア（のち有給インターン）として参加。向学館の子どもたちから“きよ兄(にい)”と呼ばれ絶大な支持を受ける。その後、今村久美が卒業した慶応大学SFCに24歳で入学し、大学3年時に神奈川県辻堂で寺子屋「陽向舎(ひなたや)」を始める。2019年、Global Shapersに選出。子どもたちの可能性をひらく学びの場の模索を続ける。

たいき：本名、阿部泰喜。1997年宮城県牡鹿郡女川町生まれ。3.11のときは女川第一中学校の1年生。中学2・3年でコラボ・スクール女川向学館に通う。実家は町で唯一の新聞店を営んでおり、震災後早朝の配達を手伝い「配達が増えた昨日も／また一軒」という俳句を詠む。2020年3月宮城大学を卒業し、中学時代から取り組んでいた音楽で、食べていく夢をかなえるため東京。SNSや路上で演奏を発表しながら、夢に向かって邁進中。

10年経って、「あのときの自分と同じ歳」だ！

3人が一堂に集まるのは、10年ぶりになるかな。10年前、きよとはボランティアとしてコラボ・スクール女川向学館で勉強を教えていて、たいきは中学生でそこに通っていたね。

きよと：ぼくがボランティアを終えて旅立つときに、久美さんがくれた手紙に「10年後に私と同じ歳になったころ、向学館での一年はきよとにとってどう感じられるのか」と書いてあったんです。10年経って、その手紙の通りにこうして振り返ることができて感慨深いです。

2011年に私は32歳で、きよとは22歳、たいきは13歳。私たち3人はほぼ10歳ずつ離れてるから、あれから10年経った今は、お互いに「あのときの自分と同じ歳」だね。きよとは、30歳になってみて、どう？

きよと：30歳って、まだ、若いというか未熟というか、分からないことだらけです(笑)

そうでしょ！たいきは、どう？あのときの“きよ兄”と同じくらいの歳になったけれど。

たいき：もっと大人になっているかと思ってましたけど…。悩みばかりで。自分の道も決まっていなくて。

新聞配達でお金を貯めて ギターを買った、たいき

震災が起きて「これは大変。自分も何かしなきゃ」という一心でコラボ・スクールをつくったのだけれど、たいきは震災当時はどんな感じだった？確か、3・11は翌日に控えた卒業式の練習で学校の体育館にいたよね。

たいき：中学校は高台にあるのですが、しばらく運動場に避難していたら、津波が見えて。それでさらに高い場所にみんな逃げました。

助かってよかった。ご実家の新聞店は津波の被害に遭ってしまっただよね。

たいき：店舗兼自宅は流されました。大事にしていたギターも、全部流されましたね。でも、家族の命は助かりました。母は津波を被りましたが、弟も危うく津波にのまれそうだったみたいですが、間一髪で助かって。祖父母の家が残ったので、しばらくはそこに身を寄せていました。電気も水道もなく、雪が降る中に、給水車まで行って水を汲んだりしました。



大変だったね。震災後に新聞配達の手伝いもしていたでしょう。アスファルトが全部はがれてしまった砂利道を通して。

たいき：道がボコボコしていて、すぐタイヤがパンクしてしまふんです。配達を手伝ってアルバイト代をもらって、それをコツコツためて、中3のころにようやくギターを買うことができました。

コラボ・スクールの卒業式では、バンド演奏していたね。それを見て、「勉強以外にこういう活動ができる場所をもっと作れば良かった」って思った。2015年に東京・文京区にカタリバ運営の居場所をオープンしたときは、バンド練習ができるスタジオをつくったんだよ。





▲子ども達に「きよ兄」となつかれる、当時のきよと。

「こういうやり方でいいの？」 きよとが空気を変えた

きよとは、もともとコラボ・スクール女川向学館にはどういうきっかけで来たの？

きよと：震災当時は、大学受験に落ち続けて浪人することになり、北海道の牧場で働いていたんです。そこに震災があって、自分も役に立ちたいと思って、インターネット検索でボランティア募集を見つけました。

検索でよく見つけてくれたね。

きよと：でも、実際にコラボ・スクールに行ったら、「ホームページに書いてあることと、なんか全然違うじゃん」って思ったんですよね。例えるなら、ファミレスのメニューと実物がちよっと違う、みたいな感じ。だからぼく、久美さんに直談判したんですよ。「これじゃ、ただの学習塾じゃないですか」って。いま思うと、来たばかりのボランティアが代表に直談判するって、若気の至りだなと思います。

意見をぶつけてくれて正直ありがたかったよ。私は震災前から、大学生と高校生の間生まれる「ナナメの関係」が「ナメの関係」を生み出してきて、そこから全体が良くなっていった。自習室のルールを子どもたちとつくったりね。

きよと：「大日本自習室憲法」のことですね。上の立場から「自習室は勉強するところだから、勉強しろ」というのではなく、「自分は勉強したいのか？」「自習室って、どうあるべきと考えるか？」という問いかけと対話がとても重要だと思ったんです。そうやって、子どもたちと向学館の自習室のルールを決めていきました。今、ぼくが運営している寺子屋「陽向舎」でも、いちばん大切にしているのは対話なんです。

当時、分数の足し算や英語のbe動詞が分からない中学生を前にして、私はどうやって基礎学力をつけていったらよいか、必死だった。「勉強が分からない」ということは、根本的に自己肯定感の低さにつながるから。一方で、子どもたちの参画をどう促していくか、ということも大切で。子どもたちに主権をどう戻していくか、その大事な役割をきよとが担ってくれていたね。

卒業後も、いつでも悩みを 相談できる存在として

たいき：ぼくは、そういう「きよ兄」の姿を、ちよっと遠くから見たいんですよね。きよ兄は、女川には絶対いない人だった。賢くて、兄貴で、自分で考えて行動する人。

たしかに「自分で考えて行動できる人」といつ出会うかというの、すごく重要だね。私自身、大学進学で故郷を出て、大学でそういう人たちと出会って刺激されて、今があるから。

きよと：たいきと交流が増えたのは、たいきと僕がコラボ・スクールを卒業してからかな。たしか、何か悩んでいるタイミングで連絡くれたよね。たいきに限らず、



▲先生の話を取ると、中学生だった頃のたいき。

係を活かして高校でキャリア教育に10年間取り組んでいたの。でもコラボ・スクールで、開校当初からそういう空気を出せていたわけじゃないんだよね。実はきよとが来た頃は、スタッフ全員がストレスを抱え込んでいて、煮詰まっていた。

きよと：そうだったんですね。ぼくは、久美さんだけでなく、スタッフ全員にも「これでいいんですか？」って問いかけた。そうしたら、みんな考え込んでますよ。その反応を見て「ああ、みんな正解が分からないし、自分の言っていることの方向性は間違っていない。今から、自分が作っていけばいいんだ」と思いました。

子どもたちも、「この人は、心から本当のことを言ってる人だ」ってきよとを信頼していた。子どもたちにとって絶対必要な人なんだ、って思った。きよとがコラボ・スクールの空気を変えていってくれたね。

巨大おにぎりを授業前に 食べるのが、楽しかった

中学時代のたいきは、弟が二人いて家で勉強することが大変な状況だったとは思うけど、成績も悪くないし、トラブルを起こすようなタイプでもなかったね。たいき

コラボ・スクールの生徒たちは、みんな悩んだり困ったりしているときに連絡をくれる感じ。たいきのように、当時は関わりが薄かった子たちもね。

子どもたちにとって、きよとは、程よい距離感なんだろうね。当時のきよと自身も悩める存在だったし。「あの時のきよ兄も悩んでいたな」ということを知っているから、卒業後も悩みを相談してくるのかもね。大人が悩みを見せるということが大事だね。

きよと：当時の授業は、最後の15分間はいつも悩み相談の時間にしていました。ぼくも「これからどうしようか、悩んでいて」といった話をして。子どもにちゃんと開示して、相談することが大切ですね。

たいき：弱みを見せる大人はいなかったかもしれないですね。震災があって、大人たちが必死にがんばっている姿は見てきたけれど。

本当は悩んでいない大人なんていないんだけどね。

たいき：というか「悩んでしかない」ですね。10年経って分かりました。



にどって、コラボ・スクールってどんな場所だったの？

たいき：勉強ができるし、友だちもいて、きよ兄みたいな人もいて、楽しい場所でした。楽しかった思い出の中に、学習時間前の食事がありません。学校が終わってから、向学館行きのバスに乗って着く頃には、いつもお腹がぺこぺこで。町の食堂のおじさんが巨大おにぎりを届けてくれていましたが、これが本当に美味しかったです。

がれきだらけになった町中を子どもたちだけで歩かせたわけにはいかないと、通学バスを町として出したんだってね。安全を守るために最善の策だとは思いますが、放課後に子どもたちだけでダラダラと好きなことをしゃべって歩くような余白は、すごく少なかった。あの「おにぎりを食べる時間」は、子どもたちが好きな人と好きな場所で好きな味を自分で選べる、唯一の自由な時間だったんだと思う。楽しかったし、大事な時間だったね。

きよと：あのおにぎりの時間も、「みんながいる場所ではないわい食べる子」と「自分の席でしか食べられない子」とがいましたね。こちらが単に「選べる自由」を示したとしても、みんなが「一斉に」「自分の思いのままに選ぶ」のは実際には難しいですから。

そうだね。きよとは、本当にいろんな子に目を配っていたね。

子どもたちと対話して作った 「大日本自習室憲法」

たいき：ぼくはきよ兄と直接関わることは少なかったけれど、きよ兄は、学校で中心のやつらから慕われているので、すごいなと思ってました。

きよと：慕われるばかりじゃなかったけどね。ある日急に全員に無視されることもあったよ(笑)

でも根本的には、子どもたちに支持されてたよね。いい

これからはどんなことを していく？

2人は、これからはどんなことをしていきたいと思っているの？

たいき：音楽がやりたいと思って上京してきたけれど、コロナもあって音楽業界は厳しいです。今は、ベースストで食べていくことを目指すと同時に、大学で学んだプログラミングで収入を得ていく道も探っています。自分の特性として「好きなこと」のスキルは「極めたい」ので、そこはベースもプログラミングも同じだと思っています。

きよと：ぼくは、コラボ・スクールで分数の足し算ができない中学生と向き合うという経験ができたことが大きくて。コラボ・スクールのボランティアを卒業してから、寺子屋「陽向舎」を5年間運営しています。最初は、視野を広げたいのと収入確保のために副業で会社員もしていました。今は「教育」にしっかり軸足を置いてみたいと思っています。「陽向舎」のような学び場を増やせるように、場の担い手を育成することにも取り組んでいこうと思っています。

たいき：やっぱりきよ兄はすごいですね。30歳を超えて、お金で動かずにチャレンジできるのはすごいと思います。

自分の心が動く方を選ぶのは、すごいことだね。嬉しいし、その原点がコラボ・スクールだと思おうとお嬢しいです。たいきも、自分と世間の接点を冷静に見つめながら、生き抜く道を模索しているところが素晴らしい。みんな頼もしいから、あとは頼んだ！(笑)

きよと：後を追いかけてますんで、引退せずにまだ走っててくださいよ！

たいき：そうですよ、久美さん！(笑)

社会とカタリバの動き

女川向学館

大槌臨学舎

双葉みらいラボ

〔3月11日〕

14時46分東日本大震災発生。日本国内観測史上最大規模のマグニチュード

〔4月17日〕

街頭であつめた約500万の募金を元手に、カタリバ代表・今村久美が被災地へ被災地で一人の少女と出会い、子どもたちと20年間伴走し続ける決意とともに「ハタチ基金」を立ち上げる

〔5月〕

女川町の教育委員会・教育長と面会し、放課後の子どもの居場所をつくること

〔7月4日〕

避難所となっていた、女川第一小学校校舎(当時の1階を借りて、コラボ・スクール「女川向学館」開校。小1・中3年を受け入れる。

〔2月〕

女川第一・第二中学校の2年生の「職場体験」を、カタリバで支援。

〔9月〕

大槌町教員委員会と話し、コラボ・スクールを大槌町にもつくることが決まる。

〔12月13日〕

町内のふれあいセンターで、コラボ・スクール「大槌臨学舎」が仮開校。まず受験前でニーズが高かった中学3年生84人の受け入れを開始。

〔3月〕

女川で37人、大槌で84人の中学3年生が高校受験を乗り越え、コラボ・スクール初の卒業生に。うち20人は東京へ赴き、支援者へのお礼を伝える「やくそく旅行」に参加。



〔4月16日・18日〕

熊本地震発生

〔6月〕

熊本県益城町に3校目となるコラボ・スクール「ましき夢創塾」開校

〔3月〕

カタリバと女川町教育委員会が「東日本大震災からの女川町の教育環境の復興のためのパートナーシップ協定」を締結。

〔3月〕

「女川町復興幸祭2016」に、子どもたちで企画したお店を出店し高校生オリジナル商品「ホヤボール」を販売。

〔4月〕

大槌臨学舎の立ち上げを担ったカタリバ職員・菅野雄太が大槌町教育専門官に着任。

〔4月〕

福島県立ふたば未来学園高校が開校する。

〔11月〕

カタリバのスタッフがふたば未来学園に入り、生徒たちへの放課後の学習支援が始まる。

〔6月〕

ふたば未来学園の技術室を借りて「ふたばコラボ・スクール」がプレオープン。

〔9月〕

ふたば未来学園の隣接地に、専用プレハブ校舎が完成。名称は「双葉みらいラボ」

〔7月〕

西日本豪雨で被災した岡山県倉敷市で、カタリバが被災地の子ども支援を始める。

〔3月〕

女川向学館の「探究授業」で生徒が作ったプロジェクトコンマッピングを女川駅に投影したり、「女川町復興幸祭2018」で中学生が「サンマ餃子」を出す。

〔4月〕

大槌臨学舎では、オンライン教材を使った学習の個別化の取り組みが進み、小学生から高校生までがオンライン教材を活用。

〔4月〕

ふたば未来学園の新校舎が完成し、中高一貫教育がスタート。双葉みらいラボは校舎内に新設された「地域協働スペース」へ移転。

〔10月12日〕

令和元年東日本台風が本州に上陸。被害の大きかった長野県長野市で「カタリバ・パーク」を実施。

〔1月〕

商品の作成から販売までの体験を通して販売について学ぶプログラム「おながわ中学生経営部」が発足。

〔6月〕

町内唯一の高校である県立大槌高等学校内の2教室で、大槌臨学舎の運営が始まる。

〔2月〕

新型コロナウイルスが全国的に広がり、3月2日から全国一斉休校の通達。コラボ・スクール各拠点ではオンライン授業を実施。

〔7月〕

令和2年7月豪雨で被災した、熊本県人吉市・球磨村で「カタリバ・パーク」を実施。

〔1月〕

新型コロナウイルスの感染防止のため、2度目の緊急事態宣言が首都圏を中心に発令される。

〔3月〕

東日本大震災10周年

〔4月〕

女川向学館が、女川駅前に移転する。



2021

2020

2019

2018

2017

2016

2015

2014

2013

2012

2011

女川町の先生だった 佐藤敏郎さんと見つめ直す これまでの10年、そしてこれから



東日本大震災という、かつてないほどの大規模な災害の中で生まれた、コラボ・スクール女川向学館。「外からの支援者」だったカタリバも、10年の時のなかで、地域とともに新たな危機にも立ち向かっています。元女川中学校の教員で、現在はカタリバ・アドバイザーとして力を貸してくれる佐藤敏郎さんと、カタリバ代表理事・今村久美がこの10年を振り返りました。

佐藤敏郎 1963年宮城県石巻市生まれ。東日本大震災当時は、女川第一中学校(現在の女川中学校)の国語科教諭として、生徒たちの想いを五七五に込める俳句づくりの授業を行い、様々なメディアで紹介される。また津波により大川小学校で次女を亡くし、「小さな命の意味を考える会」を立ち上げる。2015年3月に学校を退職し、カタリバのアドバイザーやスマートサブライビジョンの理事などを務め、全国で防災の講演活動等を行う。女川の今を伝えるラジオ「おながわなう。」のパーソナリティーとしても活躍する。

「非日常」をつくってきたカタリバが、 女川町と「日常」をつくることになった

(久美)東日本大震災から10年経つということで、元教員でもあり、その後カタリバのアドバイザーとして活躍していた佐藤敏郎さんと、これまでのことを振り返りたいです。

10年って、当時の小学6年生が大学4年生になって4月から社会人...という時間の流れですね。いろいろな変化がありました。でもあのときカタリバがいなかったら、女川はもっと大変だったなと思うんですよ。

そう言っていたら、ありがたいです。最初に東北に行ったのは4月で、そこから伝手をたどって各地に行きましたが、なかなか自分たちができることがなかった。

カタリバはそれまで学校に「非日常」を持ち込む「カタリ場」という事業だけをしていたのですが、各地で「そんなものは必要ない」と言われて。当たり前ですが、そのとき現地が求めているのは「日常」だったんです。

そんな中、最後にたどり着いたのが女川町でした。当時の教育長・遠藤定治さんが、お会いしたその場で「お願いします」と即決してくださいました。そこから突貫で、放課後に子どもたちを受け入れるコラボ・スクール女川向学館開校の準備が始まりました。

あのときコラボ・スクールが放課後の子どもたちを受け入れてくれて、本当に助かりました。4月ごろ避難所で「子どもたちがうるさい」と言われて、教員が行ったんですけど、別にうるさくないんですよ。大人たちもみんなすごいストレスがたまっているから、子どもが数人集まって漫画を読んでいるだけでも、うるさく感じてイライラしてしまう。それで、夜間に図書室に子どもを集めて学習会を開き、教員が見守ることにしたのですが、正直とても負担でした。

先生たちも被災されておられますし、日中だけでなく夜も教員として子どもたちを見守っていたら、自身の家庭の

時間が全くなくなってしまいますよね。女川に伺った4月下旬、先生たちの疲労がピークに達していると感じました。放課後の居場所をつくることになったのは、避難所や狭い仮設住宅で子どもたちが安心して過ごせる場所がなかったからです。でももう一つの側面として、子どもたちもしっかりと向き合っべき存在の学校の先生や保護者が、物理的に子どもたちと離れて一息つけることが求められていたのかもしれない。

ほとんどが「花束」の支援だけれど、 カタリバは「種まき」の支援だった

女川に最初に伺ったのは4月下旬でしたが、敏郎さんとの出会いは7月でしたね。

最初にカタリバと会ったのは、コラボ・スクール女川向学館の開校直前に、教育委員会とカタリバが開催した会議でした。前日に校長から「土曜だけ参加してくれ」と言われて、しぶしぶ参加した会ではあったのだけど、参加してみたらすごく良かった。

それまでずっと「衣食住どうする？行方不明者うんぬん」という話しかしてこなかったんだけど、震災後に初めて「子どもたちの教育をどうする？」という話をできたんですね。教育のことは本当はとても大事なことで、自分たちではしてこなかった。少し未来の話を、みんなで対話できたことは本当に良かったと思う。

ありがとうございます。会議の開催もコラボ・スクールの開校も、周囲からは厳しい声をいただくことがほとんどでした。女川には、「町のことは、町の学校の先生たちがやるべき」という声もけっこうありました。

「東京からNPO?なんだべ?」ってなるしね。女川は沿岸部の小さい町ということもあって、震災前から地域と学校のつながりは強かった。地域の人を講師に招いて「ふるさと教育」などとして「学社融合」にも積極的でした。

でも「NPOを受け入れる」というところまでは、考えら

れなかった。震災で星の数ほど外から支援がやってきました。私は支援には「花束」の支援と「種まき」の支援があると思っています。「花束」は芸能人の慰問などです。「花束」は、もらったその時は嬉しいけれどやがて花は散ってしまう。それでいうとカタリバは「種まき」の支援だと思っています。時間をかけて、育っていく。「花束」も「種まき」もどちらも大切な支援です。

10年経って、色々なことが生まれています。例えば職場体験も、カタリバがいたからこそ今のスタイルができた。今はもう、当たり前にある遺産になっている。この間知り合いの先生が女川中に赴任したんだけど、「女川中の職場体験、面白いんですよ」と自慢してきてたんですよ(笑)

町の大部分や職場が流された中で 厳しい現実と向き合った、職場体験

職場体験も、地域からは「なぜ学校行事を先生たちがやるなの?」とたくさん厳しいご意見をいただきました。

私も校長に「カタリバに協力してもらって今年も職場体験をすることにしたら」と聞かされた時は「町の大部分が流されて、職場も流されているのに、どうやって?」と驚きました。

でも、カタリバに手伝ってもらった職場体験はそれまでとは全く違っていた。生徒が行きたい職場を選んで、志望動機と履歴書を書いて、面接をして体験先の職場を決める。「これこそ職場体験だ!」と思いました。震災で厳しい現実に向き合っている職場を、生徒たちが間近で見る機会にもなりました。彼らにとってかけがえのない体験だったと思います。

職場体験の生徒の感想で「震災で漁に行けないから、俺たちの仕事は今ない。それをよく見ておけ」と言われ、働く厳しさを知った」と書いていた生徒もいました。

日々の学習面でも、コラボ・スクールと学校とで情報交換したり連携が深まっていった。ある時、「数学の解き方の

順番が向学館と学校ではちょっと違う」という話になって、コラボ・スクールの若いスタッフが学校に来て、学校のベテラン先生がすごく喜びましたよ。

別に、どちらの解き方の順番でも答えは変わらないんだけど、それまでは学校と塾はなんとなく敵対しがちだった。でも、学校でも塾でも家庭でもない「コラボ・スクール」という存在ができたことで、お互いに対話する機会が作れた。

震災から1年以上経ったタイミングで、子どもたちの心や体への影響も

コラボ・スクールを開いてから数か月が経っていると、最初は「落ち着いて勉強できることがうれしい」と言っていた子どもたちが、中だるみというか、勉強に身が入らなくなってきたんですね。話をじっくり聞いてみると、「勉強がまったくわからない」と言う。

自己肯定感を持って、震災の大変な状況をバネにして成長するには、まず目の前の勉強がきちんと分かるようになることが重要なのだとはじめて気づかされました。カタリバはそれまでの事業では学習支援をしていなかったので、「学習指導」については手探りでした。

震災に関係なく、集団授業で取り残されてしまった子を十分にはフォローできなかったという学校の課題はありますね。学校でも、震災後の子どもたちの様子には様々な変化がありました。

震災直後は「仮設住宅に入れるまで、みんなでがんばろう！」という緊張感があったのですが、2011年11月には全員が避難所を出ることができました。すると今度は「いつまで仮設住宅なんだろう」と先が見えなくなり、一気に倦怠感がやってきました。2012年の夏休み明けから、学校を休みがちになったり教室にいらなくて保健室に駆け込んだりする子が急増しました。

2018年の西日本豪雨で被災した岡山に行ったときは、敏郎さんの話を、現地の先生たちが涙を流しながら聞いていたことがとても印象的でした。

被災すると「被災」という大きな荷物を、大人も子どももみんな背負うことになるんですよ。とっても苦しくて重いけれど、でも簡単には荷物のすべてをおろすことはできない。10年経とうが20年経とうが。

でも、せめてその荷物の中身がなんであるかを理解することができれば、違うと思うんです。「被災」も自分の大切な一部として、背負っていけるかもしれない。

岡山の先生方は、荷物の中身が分かって、涙されていたんですね。



コラボ・スクールでも子どもへの体調不良で救急車を呼んだことがあります。また学校でちょっとしたトラブルがあった子について、先生から電話があり、「コラボ・スクールで様子を見守るといふこともありました。コラボ・スクールに先生が見学に来てくださることも増えました。

最初は「先生たちも被災されているので、放課後はこちらにまかせてください」という感じでしたが、「一人の子を学校とカタリバで一緒に見守っていく」という形になっていきました。今は、学校の授業の中にカタリバのスタッフが入っていったりもしています。

すべての仮設住宅が解体されたのは2019年、たくさん子どもたちが巣立っていった

女川は町の8割が津波で流されましたが、2019年末ようやくすべての仮設住宅が解体されました。その間にたくさん子どもたちが巣立っていきましたが、町の復興に子どもたちが主体的にかかわる仕掛けもたくさんしていますよ。



コロナウイルスや新たな危機にも対応、まだ見ぬ子どもたちへ、これからも会いに行く

カタリバは「未来はつくれる」というキャッチコピーを掲げていますが、この10年、一緒に様々な災害やコロナウイルスの混乱に対応してきて、本当にそう思うんですよ。

2020年2月27日午後には総理から臨時休校の話があった、土日ははさんで4日後には休校になった。全国の学校の先生たちはとても慌てたと思います。女川の場合は、コラボ・スクールがすぐにタブレットと無線LANを手配して、オンライン授業を行えるようにしてくれた。そのことに学校も地域も、とてもありがたがっていましたよ。

これまで築いた10年間の関係性が、今回のコロナの緊急時に活かされたと思います。町民の信頼があったので、すぐに動いて危機に対応できた。子どもたちを放置せずにすみませんでした。こういうことはスピードが何より大事だと思うんです。

コロナも災害も、絶対に起きてほしくないことですよ。でもカタリバとの関わりを通じて、子どもたちには起きてしまったことへの意味づけができていると思うんです。辛い経験も、「あれがあったから、今の自分がある」と、より良い未来をつくることにつながっていたと思える。

コラボ・スクールだけでなく各拠点でもオンライン対応をしましたし、今回「カタリバオンライン」という、オンライン上の子どもたちの居場所と学びの場づくりを始めました。始めてみると、新たな気づきもたくさんありました。例えば、以前から不登校だった子が、カタリバオンラインで居場所を見つけて、いきいきとしたり。敏郎さんには、「やや校長」という役割を担ってもらっていますね。

カタリバオンラインは学校とは違うから、「やや校長」にしてみました。「やや校長」として参加するときは、紙で描いたネクタイをつけるんです(笑)

「女川町復興祭」で子どもたちが考えた新しい名産品を出店したり、プロジェクトシンマッピングを制作して披露したり。女川町は震災前から地域が学校に協力する風土はありましたけれど、カタリバがあることで、それが広がった気がします。

当時は私も、女川と大槌に家をこまえて往来していましたが、その後も災害が東北以外にも各地で起き、日本全国に出向くようになりました。カタリバが今のようになり現地に受け入れられるようになったのは、その時々スタッフやボランティアが、きちんと地域の方とコミュニケーションをとり続けてくれたおかげだと思っています。

「被災」という荷物を背負う辛さを、熊本や岡山など日本各地の被災地と分かち合う

東日本大震災の後も、様々な災害が続くようになりましてよ。

コラボ・スクールでの経験があったので、その後の災害でも、勇気をもって早期に支援活動に入ることができました。2016年の熊本地震では、敏郎さんが教員を辞めていらっしゃったので、一緒に現地に向かって、「自身のご経験を現地の先生方に話していただきました。

カタリバは、女川の事例を別の地域にも当てはめようとしない。それがいいですよ。災害の形も、そこでの支援の仕方も、地域によって異なってくると思うんです。みんなこれまで経験したことのない災害に、混乱し戸惑っている。

だから、まずは現地の役場の方や先生たちの話を聞く。一緒に水を汲んだりしながらね。それで「いま、こういうことに困っていて」とおっしゃるので、「ああ、それは女川でも同じことがあります」とお伝えすると、「その後、どうされたんですか？」と必ず聞かれます。そのときに「あくまで女川の場合ですが」とお伝えする。そこから「今回はどうしようか」と、一緒に考え始めることができます。

そのゆるさが良いですよ。「いつ来てもいいんだ」という、学校でも家庭でもない第三の場所が、これからの社会には必要だと思うんです。でもそういう場所は、自然発生的には生まれてこない。カタリバのスタッフは教職免許やカウンセラーなどの専門性を持つ集団ではないですが、お兄さんお姉さんというゆるさだからこそ作れる雰囲気があり、その中で子どもたちの安心や意欲が生まれていると感じます。

カタリバの「ナナメの関係」は、学校や今の社会に必要なものだと思います。カタリバオンラインも、授業のメインを担当する講師のほかに、子どもに伴走するメンターを置いていて、そうした関係性の中で対話が生まれている。オンライン授業でも、ちゃんと「関係性の中で学ぶ」ことができています。もちろん対面授業の良さもあるから、今回の経験を活かしてハイブリッドでやっていけると良いですよ。

こうした危機が起きると、何事も本質が問われます。その場しのぎをするのではなく、本質は何かを考え、余計なものはそぎ落とし、必要であれば新しいことを取り入れていく。そういうイノベーター的な姿勢は、学校こそ必要だと思います。

東日本大震災から10年、カタリバが創業してから20年になります。機会が必要なのは、なにもに出会っていない子どもたちがまだ日本にはたくさんいます。

コロナ対策での休校期間中は、「いつもは給食があるけど、学校がないから一食だった」という子もいました。東北の子どもたちとの関わりを振り返っても、不登校気味だった子が被災してさらに精神不安定になりリストカットしてしまうなど、リアルに直面できなくていい子たちも存在します。コロナウイルスの脅威はまだ先が見えていませんが、これから先の10年も、様々な形で子どもたちに会いに行きたいと思っています。

宮城県女川町 渡邊 洸

女川事業責任者

震災から10年が経ち一区切りのタイミングですが、当時0歳だった子はまだ小学生と、劣悪な教育環境の中で育ってきた子ども達はこれからも存在します。被災した子ども達が自分の人生を切り拓いていくことができるよう、向学館は支援を続けます。また、拠点をまちなかへ移設し、子ども達と大人の交流機会を増やしてまちぐるみで子どもを育てていく体制を作ろうと考えています。さらに、これらの活動を持続可能なものにしていくことにも挑戦します。復興のリソースは今後ますます減少していくことが予想されますが、それでも内部の力で活動を継続できる体制を作ることが重要です。10年目で新たなステージへと進む女川向学館をこれからもよろしくお願い申し上げます。



岩手県大槌町 菅野 祐太

大槌事業責任者・大槌町教育専門官

この10年間は「ハードの復興」が最も重要とされ、町も一体となってみんなで取り組んできました。個人の思いや気持ちを抑えて、そのプロセスに取り組んで来た人もあると思います。10年経ってハードは整いましたが、「復興したように見えるこの町をこれからどうしていくのか？そこで自分はどうしていくのか？」という問いが突きつけられています。これからは、「みんなで復興」ではなく、この問いにひとりひとりが向き合っていく必要があります。子どもたちとこの問いを育てていくのが、マイプロジェクトです。「みんなは地域に何が必要と思っているか」ではなく、「私がこの地域でどうありたいか、私が地域にどうあってほしいか」からマイプロジェクトは始まる。カタリバが取り組んできた子どもたちへの伴走が、この町のこれからの10年にこそ必要だと考えています。



福島県双葉郡 長谷川 勇紀

ふたば事業責任者・福島県復興教育アドバイザー

「夏休み、みらいラボのお手伝いに行ってもいいですか？」そんな連絡が、大学生となった卒業生たちから届くようになりました。ふたば未来学園が開校してから6年。全町避難を経験した町には、少しずつ、子どもたちの声に戻ってきました。それでも、厳しい状態は続きます。いまだに立ち入ることができない場所もある中で、元の町に戻すことは困難です。そんな中、マイプロジェクトに取り組むある卒業生が「復興は、町を元に戻すことではなく、町とともに、行動し続けていくことだ」と言っていました。今はまだ、小さな芽かもしれないけれど、町の希望だった子どもたちが大人になり、新たな町を創る担い手となって動き始めています。人々のやさしさの循環が起こる熱源として、双葉みらいラボはこれからも活動を続けていきます。



これからの東北での活動

マイプロジェクト

身の回りの課題や関心をテーマにプロジェクトを立ち上げ、実行することを通して学ぶ、実践型探究学習プログラム「マイプロジェクト」。この「マイプロジェクト」は、2012年8月に高校生と大槌町長が対話の場を設けたことから、始まりました。町長に復興計画を聞く中で、「大槌のために私たちができることは何だろう」という想いを深めていった高校生たちは、それぞれの想いを小さなアクションにして、形にしはじめます。それが「マイプロジェクト」の原型でした。東北から生まれたこの取り組みは、2013年には12プロジェクト、18人の参加でしたが、今ではカタリバの主要な取り組みの1つとなりました。2020年度のマイプロジェクトアワードには4,800プロジェクト、13,600名を超える高校生からのエントリーがあり、全国の学校や子どもたちに広く知られるようになってきています。



双葉みらいラボ

双葉郡8町村に存在していた学校が震災の影響で分散したことを受け、双葉郡の教育環境再整備の核として誕生した学校・ふたば未来学園。「学校の中で、ナナメの関係性を日常的に届けられる居場所を子どもたちへ」というコンセプトで、ふたば未来学園の中に「双葉みらいラボ」が2017年6月に生まれました。開設から1年で、利用者は延べ1万人以上。先生方からの送り出しもあって、在籍生徒の80%以上が1度は利用したことのある居場所になりました。利用生徒へのアンケートでは「少し自分を認め、前向きに考えることができるようになった」「話しかけてくれて不安や悩みを自然に言わせてくれる」などの声も。自己肯定感や進路、学校生活に関する意欲の高まりなどポジティブな変化が起き、子どもたちの心のケアにもつながっていることがわかりました。

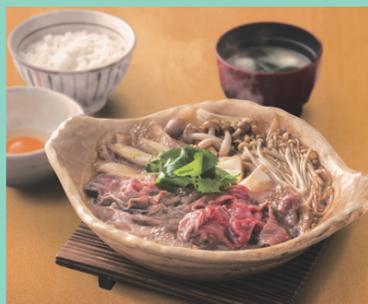


東北から新しく生まれた取り組み

カタリバは東北の子どもたちのこれからのために、常に支援のかたちを進化させています。東北を含め、全国の高校生が自分の身近な問題や地域の課題を自ら見つけ、解決するための実践型探究学習「マイプロジェクト」や、コロナ禍で困窮する子どもたちに向けたオンライン支援、緊急時の災害支援など、どんな環境にある子どもたちであっても、意欲と創造性を育める社会を築くために立ち止まることはありません。カタリバを通して、多くの機会を子どもたちに届け、日本の未来を共に創っていただけるよう、活動を続けてまいります。引き続き、温かいご支援をよろしくお願いいたします。

法人向け ご支援の方法例

① 売上の一部をご寄付



期間限定のイベントで、イベントや商品の売り上げの一部をご寄付いただきました

② マatchingギフトによるご寄付



社員が寄付し、さらに会社が同額相当を上乗せする形でご寄付いただきました。

③ ご寄付以外のご支援例

古本 / 不用品



不要になった服や本などを集め、その売上をご寄付いただけます。

寄付つき 自販機の設置



寄付つき自販機を社内に設置いただくことで、売上の一部をご寄付になります。

ご支援後には、活動のご報告をさせていただきます

ご支援をいただいた際に活動の様子をお伝えする資料を送付させていただくほか、その後もメールマガジン、年1回発行の年次報告書(紙媒体)、事業報告会等にて定期的に活動のご報告をさせていただきます。また、団体概要や事業のご紹介をしている団体パンフレットもございますので、必要に応じてお送りさせていただきます。年度ごとの財務報告ハイライトは「年次報告」ページをご確認ください。

ご支援後



寄付受領証(領収書にあたるもの)と共に、子どもたちからのお礼の手紙や活動報告をお送りします。

定期的に



子どもたちの様子や活動の近況をメールにて、年1回発行の報告書にて成果や会計報告をさせていただきます。

事業報告会



代表理事やスタッフより、活動の報告をさせていただきます。

社名の掲載



WEB、年次報告書などで金額に応じてロゴや社名の掲載をさせていただきます。

NPO カタリバへのご寄付は、税制優遇の対象となります

ご寄付に関して お電話、もしくはWEBサイトからお申し込み、お問い合わせください。

0120-130-227 平日9時半~16時
03-5327-5667 平日10時~18時

カタリバ 寄付 検索
<https://www.katariba.or.jp/donate>

SAPPORO サッポロホールディングス株式会社
RICHARD MILLE RM JAPAN Foundation リシャールミルジャパン株式会社
BANK OF AMERICA BofA証券株式会社
ハタチ基金 公益社団法人ハタチ基金
大塚 株式会社大塚
EY EY新日本有限責任監査法人
Y! ネット募金 ヤフーネット募金
WILL GROUP 株式会社ウィルグループ
CHARITY PLATFORM NPO法人チャリティ・プラットフォーム
sojitz 双日株式会社
KOMATSU 100 Anniversary コマツ
CHOICE HOTELS JAPAN 株式会社チョイスホテルズジャパン
PRINCESS プリンセス・クルーズ
みんなでがんばろう日本 公益財団法人東日本大震災復興支援財団
Philanthropy 公益社団法人日本フィランソロジー協会
PLUST 株式会社プラス
Morgan Stanley モルガン・スタンレー
三井物産株式会社 MITSUBI & CO.
ONE TENTH Project
Dr. Recella ドクターリセラ株式会社
Goldman Sachs ゴールドマン・サックス
日本財団 THE NIPPON FOUNDATION
宗教学院 救世軍
有限会社アオイ農園
株式会社 ファーゴ fargo
ニンジャ不動産株式会社
友野工業株式会社 TIND
一般財団法人 戸沢暢美財団
古本買取通販ドットコム株式会社
ピーアークホールディングス株式会社
(宗) 妙見宮 海上山 妙福寺
Kyuentai e. V.
株式会社ポケモン
株式会社 東芝
学校法人啓明学院
株式会社資生堂
株式会社紀伊國屋書店
株式会社ドン・ヒラノ
株式会社ジスクリエーション
株式会社セールスフォース・ドットコム
ブラザー工業株式会社
株式会社Tポイント・ジャパン
日本コカ・コーラ株式会社
コカ・コーラボトラーズジャパン株式会社
みちのくコカ・コーラボトリング株式会社
公益財団法人 コカ・コーラ教育・環境財団
社会福祉法人 宮城県共同募金会
横浜ゴム株式会社
YOKOHAMAまごころ基金
株式会社CROSS
株式会社ボウ・ベル・サンテ
Estudio Candela
ニュートンワークス株式会社
株式会社バリューブックス
表千家京都青年部
株式会社マステック
ふんばろう東日本支援プロジェクト
アイワチャリティコンサート実行委員会
株式会社新緑
クリフォードチャンス法律事務所 外国法共同事業
いのちをつなぐチャリティマルシェ
大東建託株式会社
P&Gジャパン社員寄付基金
一般財団法人東京マラソン財団
高槻市教職員組合
おながわ会
特定非営利活動法人WE21ジャパンみなみ
外国法共同事業法律事務所リンクレータース
PrintNext Troops
Nutrition & Sante Group
株式会社小田急百貨店
株式会社ソニー・ミュージックアーティスツ
summerset college
パークレイズ証券株式会社
有限会社 城山観光
ap bank
オリエンタルホテル 東京ベイ
ラブフォー・ジャパン
男声合唱団 横浜グリーンクラブ
八千代特殊金属株式会社
ボランティアグループさくらんぼ
株式会社カネマン
南日本新聞社
ファッションチーム フリマ&募金
Bay Area HEART
南カリフォルニア米協会
3.11. その1週間後プロジェクト街頭募金
NPO法人ETIC.
ならやまと整形外科スポーツクリニック
三方よし研究会
株式会社K2 COMPANY
浅野学園生徒会
株式会社ビーフォレスト
株式会社オールウイズ
コムテック株式会社
東松山市社会福祉協議会 高坂支部
16ミリ試写室(横須賀市)
エコ・ファースト推進協議会
株式会社東北システムズ・サポート
サッポロ不動産開発株式会社
兵庫県古書籍商業協同組合
パワーエステート株式会社
Le voci
Tokyo 2 Tohoku
Laffoo 関西支部
ニフティ株式会社
ほか、多数

多大なるご支援をいただき、心から感謝申し上げます。

災害発生時に1秒でも早く
子ども支援を開始するために

「sonaeru」 プロジェクト

災害時の子ども支援に必要なのは、1分1秒でも早く子どもたちの居場所をつくること

これまでの支援活動で、日常を突然奪われ、心身ともに疲弊してしまう子どもたちを何人も目にしてきましたが、発災直後は、保護者である大人たちは、泥をかき出したり瓦礫を撤去するなど、目の前のことに必死で、子どもたちの相手をする余裕なんてない、というのが実情です。

だからこそ、第三者がそこに1秒でも早く駆けつけて、子どもたちの支援をスタートできること。それが、発災直後の子ども支援において最も大事なことでと考えています。わたしたちがこれまでの支援で得た経験をもとに、「災害直後から、子どもたちに寄り添いサポートを行いたい」という想いから、平時から自治体・企業とアライアンスを組むことで、セクターを越えたスムーズな連携を行えるようにする、災害時子ども支援「sonaeru」プロジェクトを設立しました。



こうしたカタリバの活動は、サポーターの
毎月の寄付によって支えられています

「どんな環境に生まれ育っても、未来をつくりだす力を育める社会」を実現するために。私たちはサポーター会員の皆さまを、毎月のご寄付を通して、子どもたちの未来をつくっていく仲間と考えています。経常費用のうち約90%は、プログラム費用にあてられています(2019年8月期)。



心からの
「ありがとう」を皆様へ



代表理事
今村 久美

2011年4月、一人の高校生との出逢いが、全ての始まりでした。彼女は両親を津波で失っていましたが、避難所で居場所のない小さな子どもたちの面倒を見ていました。「この子たちは私より悲しいはずだから」その笑顔の奥にある、ピンと張り詰めた糸が、どこかで切れてしまうのではないか。その日からずっと頭から離れませんでした。「子どもたちが笑いたいときも悲しいときも、どんな時も受け止められる場所を作ろう」。そう決めて走り出しました。しかし、カタリバだけでは無力です。被災した町の人たち、世界中から駆けつけてくれる人たち、遠くからお金で支えてくれる寄付者の方々。それぞれの持っている力を「コラボ(レシジョン)」して、居場所をつくろう。それがコラボ・スクールの始まりです。

時間は誰にとっても平等です。卒業後、新たな困難の前にいるという話も聞きます。でも成人式の写真が届くたび、いろんな事はあるだろうけど「いま、そこにいること」それ自体に、心から安堵します。

「生きてくれて、ありがとう」と子どもたちへ。そして共にあたたかな眼差しで見守ってくれた皆様に、心からのお礼を伝えたいです。

みなさんの応援で、10年間
続けることができました。



常務理事/事務局長
鶴賀 康久
(元コラボ・スクール
女川向学館 校長)

この10年間、4702名の皆さまからご寄付をいただきました。2011年、私は東北の事業を立ち上げる責任者でした。東北の現地で、寄付者の皆さまと直接お話しする機会にも、多く恵まれました。

「子どもたちの様子はどうか?」「スタッフの皆さんは、ちゃんと生活できているんですか?」「無理はしないでくださいな」と、声を掛けてもらったことは、強く記憶に残っています。

あれから10年が経ち、震災の時に小学1年生だった子は高校生になっています。大変なことも多かったですが、応援を続けてくださる方がいることで、10年間、活動を続けることができました。10年間、本当にありがとうございます。

東北の震災以後、熊本地震、岡山豪雨支援など、計4回の災害支援にスタッフを派遣してきました。カタリバが東北支援を経て得た知見・ノウハウは、他の被災地でも求められていることを、実感してきました。

再び災害が起きた時に子どもたちの居場所を守るよう、これからも備えを続けていきます。今後とも、カタリバの活動を応援くださいましたら幸いです。引き続きのご支援のほど、どうぞよろしくお願い致します。



表紙に登場してくれた、ちーちゃん。

カタリバ代表理事・今村久美が、2011年4月に被災地・女川に入った初日に避難所の前で出会った、小学3年生の女の子でした。

女川向学館に通った彼女は、いまは高校を卒業して地元で働いています。

2021年に成人する予定のちーちゃん。これからの活躍も楽しみです。